

2017年(平成29年)

第118号

(10月1日)



発行所：立正佼成会 京都教会  
 発行責任者：渉外部長 田中規之  
 編集委員長：渉外広報 植田恭司  
 〒605-0041 京都市東山区三条東町 230  
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

## 近畿ダーナ大聖堂参拝 ～近畿のダーナ衆、法輪閣で習学～

9月17～18日、「近畿ダーナ大聖堂参拝～さあ行こう！！気づけば変わる、幸せへの旅」が本部法輪閣で行われ、近畿11教会から843名、京都教会から75名の参加がありました。

大聖堂での開会式で川端健之理事長のあいさつがあり、「開祖さまは法華經に出会われて心に響いた。自分も仏になれる、周りの人も仏になれる。仏になれる方法を法華經の中に見い出された。法華經は諸經の王であり、そのエキスは2番と16番。特に重要なのは如来寿量品第16で、仏はあらゆる人をその人その人に合った方便を使って、その人にとって最上の縁を与えて下さっている。あとは仏になれる、なろうと本気で思える自分になれるか」と参加者へ投げかけました。その後、参加者は第2団参会館に移動し交流法座に入り、健康、家庭、仕事、経済、信仰の5つテーマに分かれ、日頃の共通する悩みなどを打ち明けました。

18日は法輪閣を会場に読經供養(真読：如来寿量品第16)、体験説法、講話、大法座がありました。

講話では、中村記子習学部部長から「習学とは日常生活に活かしていくこと、要は実践。自分は何を実践していくか。教えを頂いて気付いて実践する、そして人格が高まる」と習学の言葉の意味にふれ、神戸教会伊藤壯年部長の体験説法から、「女性が信仰を持っていて主人を教化するパターンはあるがダンナが信仰を持っていて奥さんを教化するパターンは少ない」と述べ、次の3つのポイントを説明しました。

①命の尊さ、今ここにいることの大事さ。自分がここにいるのは世界に男性30億人、女性30億人、男性一人と女性一人が出会うのは10の19乗分の1の確立。また男性は一生のうち精子を2兆個生み出し、女性は一生のうち卵子を500個生み出す。これらの出会う確率は10の15乗分の1。これらの出会いによって自分が生きていることを説明。出産は本仏が生ま

せようとする力と赤ちゃんの生まれようとする力があってこそあって、一人ひとり意味があって生まれている。

②教え(仏の見方)によって自分のものの見方が変わっていくこと。それは奥さんが強いから優しくしてほしいと思っていたが、自分の母が元気でいられるのは嫁が強いからそのお陰で張り合いが出て元気でいられると思えるようになったと説明。人格を高めようとするには、長所即短所が見えること。仏さまからみんなオーダーメイドの救いがある。

③近畿ダーナ大聖堂参拝に至るまでの修行のあり方。伊藤部長自身、今回の大会に向けた取り組みで、佼成会の修行は究極には「受ける、下がる」こと。支部壯年部長や支部長に頭を下げる修行の大切さを説明。個人の救済から世界の救済、自家庭だけ救われているのではいけないと本尊観・行法観にふれて説明がありました。

その後の大法座では中村習学部部長が法座主を務め、約1時間半の中、12名の質疑応答があり、交流法座での出来事、今回の大会に向けての手取り、佼成用語の意味、健康のこと、親子関係のこと、職場での会員宣言など、時間一杯に熱心に発言。中村習学部部長は丁寧に回答され、仏の見方を示されました。

最後に馬籠教会長からの挨拶があり、「来年は教団創立80周年を迎え、近畿がそのリーダーでありたい。そのために感謝と菩薩道を歩む人間になることが急務。お互いさま、仏の見方に転換する智慧を身に付けていきたい」と精進を促されました。

今回の参加者からは、「初めて開祖記念館に入り、創立者の意思に感動した」「家族のお陰で参加させて頂けた。有り難かった」「テーマ別法座では同じ悩みを持つ人どうし話しができて、色々アドバイスを頂けたことが有り難かった」など様々な感想がありました。

### 時事刻々

今年の十一月、京都国際会館で気候変動枠組条約に関する京都議定書が採択されて、20周年になります。それ以来、世界各地で、温暖化防止に向けた地道な活動が続けられています▼京都市では、2年前「しまつのこころ条例」を制定し、「新・京都ごみ半減プラン」を実施しています。さらに、今年から「小型家電を京都マラソンのメダル」という運動が始まりました▼一方、東京オリンピックに向けて「都市鉱山からつくる『みんなのメダル』プロジェクト」も4月からスタートしています。9月時点で全国から千三百三十六の自治体が参加しています▼昨今、温暖化による異常気象のため、台風や大雨などで大きな被害が起っています。待ったなしの状態が近づいていると感じざるを得ないところですが▼地球規模の問題だから、自分とは距離があると思いがちです。しかし、たとえ小さなことでも、「しまつのこころ」を持って実践することが大切ではないでしょうか。

平成29年、私たちは「育てよう若い力！ 一日一軒、出会いに行こう！」を実践して参ります。

## 今月のことば ～「苦悩」と「苦勞」～ 亀岡支部婦人部長 谷口 記子

今月は、亀岡支部の谷口が担当させていただきます。今月の会長先生のご法話は“苦悩と苦勞”です。苦悩や苦勞で私の頭に一番浮かんできたのは、私が職場（病院）で毎日会う患者さんでした。病院という場所は、明るく楽しい場所ではなく、苦しみ、悩み、不安を抱えている人が多くおられます。

高齢の患者さんが多い中で、私と同年代の女性の患者さんがおられます。重症な事故で、生死をさまよいながらも、一命を取りとめた患者さんで、2歳の子供さんもおられます。毎日のようにお見舞いに来られるお母さん。初めての出会いから、彼女の回復のスピードには驚きでした。

毎日のように訪床するようになり、はじめは食事が取れず鼻からチューブで栄養剤を入れました。初めてハンバーグが食べられた時は、感動でお見舞いに来られていたお母さんは泣いておられました。

出来ることも増えてきました。言葉が出て来たり、字を書くこともできるようになり、初めて出会ったときは、比べられない変化に嬉しい気持ちでしたが、毎日お見舞いに来られているお母さんの心境は複雑でした。

お母さんとは、いつも楽しくお話をさせてもらい、食事の相談を受けたり、好物は何か？趣味や好きな音楽のことなど、私の知らない事故前の生活のことを聞くようにもなりました。出来ることが増え、嬉しいことだと喜んでいましたが、そのころから、お母さんや家族の方から悩みを聞くようになりました。

生死をさまよっていた事故直後と比べると、嬉しいことばかりですが、どうしても事故前と比べてしまい気分は落ち込んでしまうそうです。医療スタッフとしては喜ぶべきであっても、家族の立場から見ると、現

状は明るいばかりではなく、状態が変化していく中で悩みもまた変わっていくように感じます。

闘病を続ける本人の心境は、どの様なものなのだろう…と、よく考えることがあります。長期間に渡る病院生活。一日中ベッドの上で何を考えているのだろう…と。

以前、他の患者さんに普段は何をを考えているのですか？と聞くと、「恥ずかしいから内緒」と言われました。とても明るいテンションで驚いてしまいました。苦しみや患病などを予想していたからです。

今月のご法話の中の「たくさん悩んで苦勞を重ねたことが、のちのちのその人の大きな心の財産になっている」という部分と重なりました。長く闘病され、私には想像もつかない苦悩の中で、それを乗り越えてこられた人たちばかりです。

毎日のベッド訪問を楽しみにしてくれる患者さんやその家族。その気持ちに伝えたい想いと、悩みや苦しみ、悲しみをぶつけられることの怖さに病棟に足が向かない時期もありましたが、それでも、今では私にとって1日の仕事の中で、一番充実した時間でもあり、楽しみな時間でもあります。

今日は何を聞かせてもらえるのかな？また、今日はこの話がしたいなという日もあります。苦しみをぶつけられたときは、素直な気持ちで一緒に悲しめばいいし、言葉がでなければうなずくだけでいい、今はそう考えられるようになりました。

自分に正直に患者さんに寄り添う気持ちを大切に、日々の仕事や生活の中で起こる、さまざまな悩み、苦しみを味わいながら、乗り越えていけたらと思っています。

合掌

### 一食を捧げる運動

### ～宇治支部 吉田侑加～

私が『一食を捧げる運動』について知ったのは、近畿支教区で開催された、カンボジアでの慰霊供養研修に参加したことがきっかけでした。それまでは、祖父母の部屋に募金箱があるなというぐらいの認識でした。しかし、カンボジアでの研修で、一食を捧げるとはどういうことなのか？ということを実際に考え、家族6人全員でこの運動に参加するようになりました。

カンボジアを訪れたことで、日本では見たことのない貧困の現実を目の当たりにし、自分たち日本人が物質的にはどれほど恵まれた環境にいるのかということを実感しました。

それと同時に、本当の豊かさとは何なのかを考えさせられました。カンボジアで出会った人々は貧しいながらも、笑顔で私たちを出迎えてくれ、その姿に心の

豊かさや明るさを感じました。日本人は物質的には豊かですが、心の豊かさはむしろカンボジアの人々に負けているのではないかと。互いに無関心で、街で人にぶつかってもお互い謝りもせず、素通りする日本は本当に幸せな社会なのか、そういう考えが生まれました。

このような体験から、私にとって『一食を捧げる運動』とは、単に貧しい人々にご飯を与えるという一方的なものではなく、物質的な豊かさを分配し、カンボジアの人々の笑顔と共に心の豊かさを思い出す機会とする、双方にとって良い運動となっています。



一食を捧げる運動

wakachiai  
sharing meals for friends

## 第57回かめおかこころ塾

## ～こころの華を咲かせましょう～

9月9日、ガレリアかめおかにおいて「第57回かめおかこころ塾」(主催：かめおか宗教懇話会)が開催され、加盟団体の会員が多数参加しました。

今回は、元立正佼成会理事・元京都教会長の青嶋久夫師が「こころの華を咲かせましょう 『～あかるく・やさしく・あたたかく』をモットーに～」の講題で、約1時間半の講演を行いました。

青嶋師はこのかめおか宗教懇話会発会の歴史に触れ、「多くの有名な先生方が集われたことや、20年間もこうして活動が続けられてきたことは素晴らしい。ものごとが起きるには必ず何か起きる『もと』がある。

この宗教懇話会の、精神性の高さにも発会する理由があったはずで、その要因の一つに明治時代に『おほもと』が亀岡に立教されたことや、その活動が一宗教の枠にとどまらず、人類愛善会や世界連邦を目指しており、エスペラント語の普及に努められている。

また、過去の宗教弾圧にも屈せず、平和の心を持つ人々を育て続けられてきたことが、今日の懇話会を作り上げている」と話しました。

そして、立正佼成会京都教会長に赴任した昭和63年当時を振り返り、「京都駅からタクシーに乗車して『佼成会まで』と言っても通じず、スーパーの厚生会のほうが有名だった。

タクシーの運転手から『宗教団体は、信者に水でも売って金を巻き上げてるんかね』と言われたので、『釈尊の教えをもとに人格完成を目指している団体です』と答えた。

例えば、タクシーの売上げが多い月は、奥さんが『お父さんありがとう』と感謝の言葉を述べ、少ない月は『今日は、頂いた中でやりくりしましょうね』と、不平不満を言わないことを私たち会員は実践しているのです。と言って、機関紙の『佼成』を渡した。

数年後に、現在の教会が出来た時、同じタクシーの運転手と偶然にも再会し、縁の不思議さを実感した。人がちゃんと人になっていけば教えは伝わる。土壌がある土地は、自然と教えが広まる。

私たちは、生かされているにも関わらず、自分自身の力で生きているという錯覚におちいつている。それは、父母による生命誕生の瞬間から、この命は自分だという認識になっているから。自分の五感の、満足か不満足かの判断のまま生きてきた。生きるという本能のまま生きているのが現状。

例えば、病気になったら『病気が治らなかつたらどうしよう、これだけ頑張っているのに治らない、どうしよう』と、病気そのものは悪くないにも関わらず、判断が自己流になっている。

神仏(大生命)に生かされている自分を認識することが大切であり、本来の人間らしい生き方を求道出来るのは、このこころ塾なのです」と、開催の意義を噛み砕いて説明されました。

また、「1999年に中東のヨルダンで開催された『第7回世界宗教者平和会議』に参加した時、キリストが十字架にかけられたというゴルゴダの丘に行った。

キリストが十字架にはりつけられる直前、『神のみ心のままになしたまえ』と言ったことは『信仰の極致』である。

私たちも、それぞれの教団の開祖の教えや精神に、どこまで信念を持っているかを見つめ直しましょう」と、訴えかけられました。

最後に、「蓮華の華は、泥土を養分にして泥の上に綺麗に咲く花です。人はもともと、人のために生きていこうという種を持っており、このこころ塾で仏のこころを頂いて、どんな人間に育つかが大切なのです」と、各自の精進を促し、講演の結びとしました。

## 脇祖さま報恩会

## ～青嶋元教会長を迎えて意義をかみしめた～

9月10日、「脇祖さま報恩会」が法座席で行われ、読経供養、体験説法、講話があり多くの会員さんが参拝しました。

青嶋元教会長の講話では「京都教会長赴任にあたり、庭野会長に報告に行った時『京都教会の大きな建物と勝負をしないで、救いで勝負をするようになって下さい』。そして、庭野開祖からは『京都教会の3階から地下3階すべての部屋を、毎日使えるくらいになって下さい』との言葉を頂きました」と述懐。

また、「自身の入会のきっかけとなったのは、おばが入会したことを反対しに道場に文句を言いに行った時、対応してくれた人が反発もせず、よくよく話を聞いてくれた。そうすると、自分の心の怒りや不満や

溜まっていたものが無くなって、自分の中がからっぽになっていた。その方が、自分の中の『貪・瞋・痴』を取ってくれた事に気づき、その場で入会したいとお願いした。

信仰は縁になる人によって変わる。困ったことを乗り越えてどんな人間になるか、その後、どのような価値のある人間になれるのかが大切である。

また、脇祖さまは、ご自身が数々の病におかされていながら、人々に奉仕し、喜びを伝え、『ます人さま』の精神でおられた。施しを中心とした生き方を得て、人々の『貪・瞋・痴』を取り除くことが佼成会の模範、鏡である」と話し、報恩会の意義をかみしめました。

# 本会が目指す「政治への取り組み」について

急な国会の解散により、衆議院議員選挙が行われることになりました。庭野開祖は常に「選挙」の大切さを語っていた。つまり、いい政治にするためには、いい政治家を選ぶことだからです。それとともに、私たち自身が政治に対してどのように考えているのか、どのような心得をもって投票するかを考え直す機会になるでしょう。今回は、庭野開祖の法話から「政治への取り組み」について考えてみたい。（編集部）

## ■開祖が求める政治の姿

私達は、会の創立以来、「各宗教に共通な真理を発見しよう」と唱導してまいりました。諸宗教が、互いに相違点を振りかざして争うのではなく、互いに認め合える共通点を求めずしては「平和」をこの地上に実現できないと考えたからです。

同様に政治の分野においても、偏狭さと排他的政策を振りかざして、互いに相手を悪と決めつけ、その悪をただす自分の正義のためには何をしてもよいという態度では、みずから国を滅ぼすことになりかねません。つまり、イデオロギーを超えて、共存し得るという立場に立たなければ、これからの世界は成り立たないし、問題も解決しないのではないかと思います。（昭和40年5月「躍進」）

昨今の世界や日本の政治に、他を認めない偏狭さが蔓延しているような危惧を感じている人が多いのではないのでしょうか？

## ■ほんとうの政治家を生み出すために

国民が現在の苦しさに耐えきれず、あるいは目先の小さな利益を追う余りに、一時逃れの政策や措置をヤイノヤイノと要求すれば、政府もそれに引きずられざるを得ません。

本当に腹の据わった政治家、国家の百年、二百年先の幸福のための政策を断固として貫く政治家の出現が切実に望まれる世の中になりました。目先のことや、自分のことしか考えられない国民には恨まれて目の敵とみられても、信念を貫くような政治家が出なければ、日本の運命は危ないと思うのです。

そうした政治家を生み出すのは、じつは国民自身なのです。国民自身が、よほどしっかりして、百年、二百年先のために、目先の苦しさを我慢するという心構えをもつほかないのです。

（昭和52年10月「佼成新聞」）

つまり、自分の属する団体や地域の利益のために、現在の利益のために選ぶのではなく、あくまで日本人全体のため、そして国家百年の利益のためを考え、その委託に値する人を選ばなければならないのです。

## ■今こそ、政治に関心をもって臨む

昔のノンキな時代なら、政治が気にいらぬと言って野に隠れたり、世の中がイヤだと山に籠ってしまったりしても、その人はそれなりに幸せな一生を送ることができたでしょうが、今はそんなエゴイズムは通用しません。

逃げも隠れもできないからには、みんなが力を合わせて、この地球丸が沈没しないように、安全な航海が続けられるように……と、精いっぱい工夫するほかないでしょう。その工夫を結集し、討議し、最善の方途を決定し、そして実施していくのが政治の場なのですから、ただのひとりとして政治に背を向けてはならないのです。どんなに気に入らなくても、政治を放棄してはならないのです。それを放棄することは、みずからの生存を放棄することであり、人間の仲間から出て行くことになるのです。（昭和49年6月「躍進」）

わたしたち一人ひとりが選挙を機に、政治に対する思いを見直してみましよう。

## 10～11月の主な教会行事

10月1日(日)	9:00～	朔日参り
4日(水)	9:00～	開祖さま入寂会
10日(火)	9:00～	脇祖さまご命日
13日(金)	9:00～	お会式・日蓮聖人遠忌法要
15日(日)	9:00～	釈迦牟尼仏ご命日
11月1日(水)	9:00～	朔日参り
4日(土)	9:00～	開祖さまご命日
10日(金)	9:00～	脇祖さまご命日
12日(日)	9:00～	七五三式典
15日(水)	9:00～	開祖さま生誕会

## ●メッセージ

北朝鮮と米国の応酬が毎日のように報道されています。世界は武力を持ち、その抑止力を盾に外交をしているように見えます。つまりどんなに素敵な笑顔の方でも、懐にはナイフを隠し持っている訳です。日本が目指そうとしている世界の安定した姿は何なのか。

国際社会と連携しつつも、米国追従でよいのか。米国の核の傘に守られているから、追従せざるをえないのか。唯一の被爆国として、戦争放棄した平和憲法を保持する国として、日本にしか出来ないことは何なのか。これは政治家だけではなく、私たち国民一人ひとりが考えなければならない問題です。